

チューリップのふるさと イラン

岐阜県立国際園芸アカデミー

上 田 善 弘

イランの国花はバラである。バラが香料用として栽培されたのはイランが最も古く、バラ栽培の原点を探るべく、イランを訪問した（詳細は本誌別稿を参照）。そんなイランであるが、意外と知られていないのは、チューリップの国でもあることだ。実は、イランの国旗の真ん中に描かれているのはチューリップの花である。そのチューリップは4つの剣と三日月を用いて描かれており、イスラーム革命で亡くなった殉教者を象徴しているという。

写真のチューリップは、テヘランから東約1000 kmのマシャドにある大学の野外植物調査に同行した際、5月2日に撮影したものである。マシャドから西に約300 km、北イランの山岳部でこのチューリップに出逢った。北イランからコーカサスにかけて分布する、チューリップの野生種、チューリップ・モンタナ (*Tulipa montana* = *T. wilsoniana*) である。礫の多い乾いた山の斜面に、群生せず広く散在し点々と咲いていた。まさに花の最盛期で、その赤い色がたいへん印象的であった。標高は2,000mぐらいで、周辺には高木はなくまばらに低木が生え、エレムス属、アイリス属、アリウム属などの球根植物を見ることができた。

栽培種には *T. gesneriana* の学名がつけられているが、その起源ははっきり分かっていない。トルコやイラン（ペルシャ）ではかなり長い栽培の歴史があり、ヨーロッパでのチューリップの栽培は、1554年神聖ローマ

帝国の外交官としてオスマン帝国シュレーマン大帝のもとに派遣された Ogier de Busbecq が、トルコでの栽培状況をヨーロッパに伝え、種子や球根を送った時に始まるとされている。ヨーロッパに導入された当初から、花形や花色が変化に富んでいたことからトルコやイランで栽培の過程で表れた変わりものを選んできたものと思われる。筒井（1981）はガーデンチューリップの発達史において、ヨーロッパ伝来以前の変異が蓄積された時代をアラブ時代（*gesneriana* 形成期）と称している。Mabberley（2008）の Plant-book に、イランでは13世紀以来チューリップが栽培されていて、花色が複色の品種が存在したとある。萩屋（1970）が、*T. gesneriana* の多系統の品種と野生種との交雑親和性を調査しているが、*T. montana* を用いていない。

このように *T. montana* の栽培種への関わりは不明であるが、本種はイラン北西部のトルコに近いところまで分布があるので、トルコにも自生すると思われる。そのあまりにも艶やかな赤い花色とすつと伸びる花茎から、私には栽培チューリップにも何か関わりがあっても不思議ではないような気がしてならない。

【参考文献】

- ・ 天野正之（1989）チューリップ、植物遺伝資源集成、講談社 第3巻、1067-1071
- ・ 萩屋薫（1970）チューリップの種間雑種による育種、育種学最近の進歩、第12集、71-81
- ・ 筒井澄（1981）チューリップ属における栽培種の起原とその育種、育種学最近の進歩、第23集、68-77
- ・ Mabberley, D.J.(2008) Mabberley's Plant-book, 3rd ed. Cambridge University Press



チューリップの自生する地域の風景



マシャド大学植物科学センター所蔵の *Tulipa montana* の錯葉標本